

降誕節第1主日礼拝説教 「すべての人のための旗印」

日本基督教団石神井教会 2019年12月29日

【旧約聖書日課】イザヤ書 11章1～10節

- 1 エッサイの株からひとつの芽が萌えいで
その根からひとつの若枝が育ち
- 2 その上に主の霊がとどまる。
知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊
主を知り、恐れ敬う霊。
- 3 彼は主を恐れ敬う霊に満たされる。
目に見えるところによって裁きを行わず
耳にするところによって弁護することはない。
- 4 弱い人のために正当な裁きを行い
この地の貧しい人を公平に弁護する。
その口の鞭をもって地を打ち
唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。
- 5 正義をその腰の帯とし、真実をその身に帯びる。
- 6 狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。
子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。
- 7 牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し
獅子も牛もひとしく干し草を食らう。
- 8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ
幼子は蝮の巣に手を入れる。
- 9 わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされる。
- 10 その日が来れば
エッサイの根は、すべての民の旗印として立てられ
国々はそれを求めて集う。
そのとどまるところは栄光に輝く。

【福音書日課】マタイによる福音書 2章1～12節

- 1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、²言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」³これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人も皆、同様であった。⁴王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。⁵彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。
- 6 『ユダの地、ベツレヘムよ、
お前はユダの指導者たちの中で

決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、

わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。

8そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

「わたしたちは、拝みに来たのです」

先週、わたしたちは「主のご降誕」を祝うときを迎え、すでに祝いの礼拝を重ねてきましたが、さらに、この祝いの中で年越しをし、新年を迎えようとしています。わたしたちの用いる主日聖書日課は、伝統的には1月6日「公現日」の日課聖句とされてきた福音書日課を必ず聞くことができるように、この日に配置しています。「三人の博士の来訪」として知られる出来事を描く箇所です。

わたしたちが朗読で用いている「新共同訳」では、「博士」ではなく「占星術の学者たち」と訳されています。1年前に出版された新しい翻訳では、再び以前の訳語である「博士」に戻っているようですが、近年の理解では、「博士」よりは「占星術の学者」という訳語のほうがふさわしいようです。原語（ギリシア語）では「マゴス」と言います。英語の「マジシャン」の語源になった語で、「魔術師」と訳される場合もありますが、当時の理解ではそれほど胡散臭い存在ではなく、むしろ当代一級の知識人を指す用語だったようです。ですから、伝統的には、「賢者」の意味で訳されてきたのです。

彼らの「賢者」たるゆえんは、何よりも天文学に精通していることであつたと考えられます。現代でも天文学者には飛び切り優秀な人になるものですが、古代世界では、その知識は「暦」を定め、生活を左右するものであり、国家の存亡をさえ左右する存在だったはずです。そのような知識を総動員して、彼らは、「ユダヤ人としてお生まれになった方」を訪ねてきた、というのです。しかも、彼らは真っ先にエルサレムに向かい、現在の「ユダヤ人の王」である「ヘロデ」の王宮を訪ねて、新王の誕生について確かめた、というのです。

「わたしも行って拝もう」

この「学者たち」は、「東の方」からやって来たと紹介されています。二千年前、ローマが皇帝を戴くようになっていく時代、東方では「パルティア」と呼ばれるペルシャの後継国が覇権を握っていました。ヘロデ王が一部を支配していた中東地域は、パルティアとローマの間の緩衝地帯に位置していたのです。そのような時代に、「東の方」からやってきたという「学者たち」が、「ユダヤ人の王」

を訪ね、新王誕生について確かめ、祝おうとした。それは、純粹に学問的好奇心のようなことによるとは思えません。むしろ政治的な意味合いをさえ想像させる出来事のように思えます。彼らは、「東の方」の国から政治的に派遣されてきた人々、ある種の「外交団」だったのではないのでしょうか。

そのような駆け引きは、外交政治の世界では日常茶飯事だったでしょう。実際に、「東の方」の国とヘロデの王国との間で、そのような外交が行われたということがあったとしても、おかしくありません。

けれども、わたしたちが聖書の伝える物語から考えるように促されているのは、そのような歴史的事実についてではないようです。そのような外交政治が繰り返られるような世界の現実の中に置かれている者として、わたしたちが本当に目を向け、訪ね当てるべき存在は、どこにあるのか。それは、ときの権力者の手の内にあるのか。それとも、別のところにあるのか。ヘロデの考えたであろう政治的な思惑ではなく、権力にすり寄ることを知っているエルサレムの人々が思ったであろう社会生活上の思惑でもなく、「星」が示すような、より冷静で客観的な視点に立つならば、その答えはどのように与えられるのか。聖書は、そう問いかけているのではないのでしょうか。

もちろん、そうは言っても、わたしたちの「星」の知識や理解は、たかが知れています。日頃親しんでいるはずの「聖書」の知識や理解でさえ、わたしたちには覚束ないところがあるでしょう。ヘロデは、祭司長たちや律法学者たちに「聖書」の知識を求め、さらに、あの「学者たち」にも尋ねて、結局、彼らに「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言って、彼らを送り出しています。結局、わたしたちも、「学者」頼りにならざるを得ないのでしょうか。わたしたちの「学者」が、わたしたちの見るべき方、拝むべき方を見つけ出し、指し示してくれるのを、待つしかないのでしょうか。

幼子を拝む

実のところ、福音書が語る「学者たち」の物語が示すのは、こういうことではないのでしょうか。彼らが「星」に導かれて訪ね当てた方、彼らが「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」と期待した方は、どんな特別な方でもなく、どこにでもいるような、母親と共に家の中で過ごしている一人の「幼子」に過ぎなかった、と。

確かに、その「幼子」を指し示す「星」が輝いていたのでしょう。けれども、彼ら「マゴス」の世界観からすれば、すべての人には「星」が伴っているのです。そのような中の一人の「幼子」を訪ね当てて、ひれ伏し拝んだということが、ただちに特別な「王子」の誕生ということになるのでしょうか。

彼ら「学者たち」は、ヘロデの要請にもかかわらず、夢のお告げに従って、ヘロデのところに報告に立ち寄らずに帰国しています。それは、嬰兒虐殺を企てたヘロデの魔の手から「幼子」を守るためだったと説明できるかもしれませんが、

実際に描かれているのは、彼ら「学者たち」の欺きに激怒したヘロデによって「周辺一帯にいた二歳以下の男の子」が一人残らず殺されてしまったという結末なのです（マタイ 2:16）。「幼子イエス」は、その多くの「幼子」の犠牲を払って守られる存在だった、と福音書が主張したいのだとしたら、わたしたちは、その後の主イエスのご生涯によって示されたことと相反することを、そこから読み取っていることになりやすいでしょうか。

確かに、「幼子イエス」は、ヘロデの虐殺の企てを逃れることができました。しかし、そのことと、学者たちがヘロデのもとに報告に立ち寄らなかったこととは、何の関係もないのです。それでは、なぜ彼らは、ヘロデのところには立ち寄らずに、別の道を通して自分たちの国へ帰って行ったのでしょうか。なぜ、そうするようにとの夢のお告げを、素直に受け入れたのでしょうか。「星」の動きを知る彼らの知識は、そこでどのように働いたのでしょうか。それは、もしかすると、彼ら学者たちが、もはやヘロデに報告することができるような「王子の誕生」を見てはいなかった、ということなのではないでしょうか。

そこで彼らが見たのは、母親と共に家の中で過ごす一人の「幼子」にすぎなかったのです。それ以上でも、以下でもないのです。王宮で生まれた王子であれば、王に報告し、国の内外に告知するべきでしょう。たとえ王宮で生まれたのでなくても、「王子」としての出自であると認められるのであれば、王に報告するべきでしょう。しかし、何者でもない、王の地位を継ぐのでも脅かすのでもない、一庶民の家庭に生まれた男子の誕生を、わざわざ王に報告する必要があると、誰が考えるのでしょうか。

主イエスもまた、そのような「幼子」の一人としてお生まれになられたのです。そのような「幼子」の一人として生まれた方として主イエスを見るようにと、福音書は、この出来事を物語ることを通して、告げているのではないのでしょうか。

確かに、主イエスは、名もない幼子や子どもに目を向けるよう、弟子たちに繰り返し教えられたのです。そのような小さな者の一人でもつまずかせてはならないと、厳しくおっしゃられたのです（18章）。いいえ、幼子や子どもたちばかりではありません。わたしたちの周囲にあって、わたしたちが見過ごしがちな多くの小さな存在に目を向けられて、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（25:40）とお教えになられたのです。そう言えば、そのようなお教えになられたたとえで、主イエスはそのことを「王」としてお語りになられていました。

それが、降誕の物語で、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」として探し当てられた「幼子」なのです。王宮ではない、どこにでもある家の中で母親と共に過ごす「幼子」に目を向け、その子の前でひれ伏し拝み、宝の箱を開けて最高の贈り物を献げる。それは、主イエスご自身が、すべての「幼子」、すべての「小さき者」に向けてなされたことなのです。そのような主イエスのお姿を、わたしたちは、クリスマスの星のもとで、「幼子」らの中に、「小さき者」たちの中にこそ、見るのです。そこに、わたしたちの喜びがあることを、知るのです。